

本と旅する

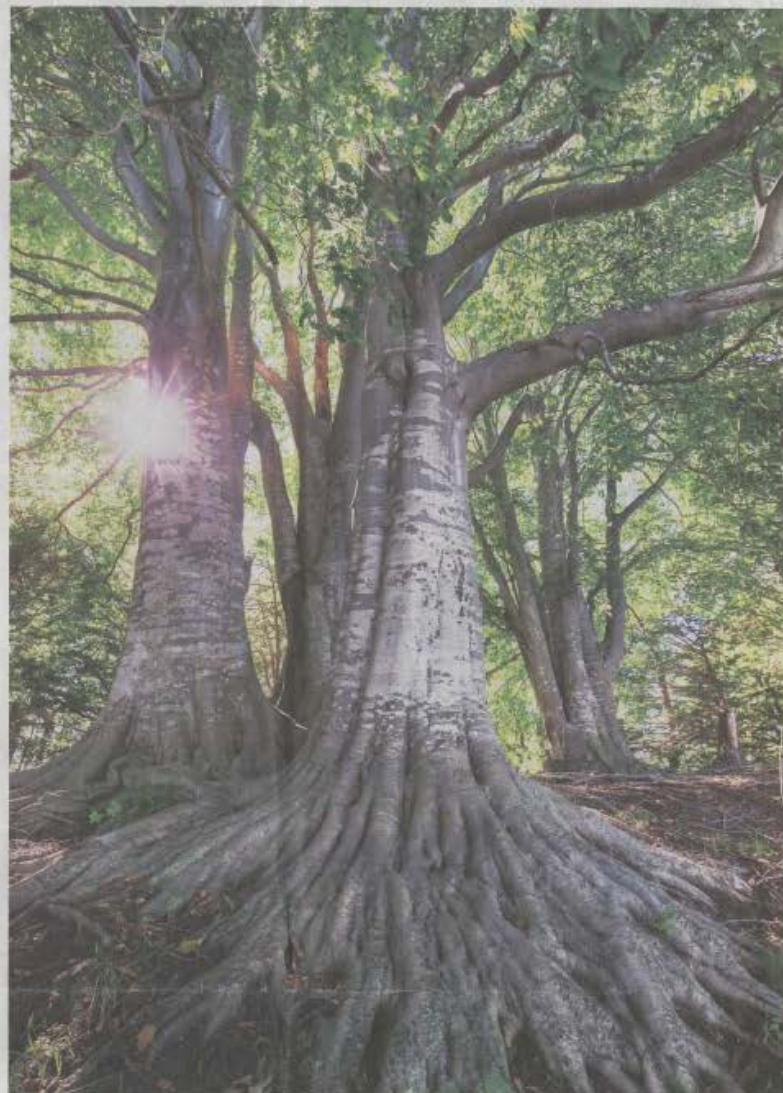


野幌



「この土地には何があるんだ？」
「すべてがここにはある、生きる喜びのすべて、
家族愛と友情と誇り、そういったものがある（後略）」

村上龍「希望の国のエクソダス」



1971年に江別市指定文化財第1号となった「千古園」を見守るフナの大木。樹齢は120年近い。ほかにクルミ、イチイ、サウラなどの古木もある千古園内は晩夏でも冷気をふくんていた

将来託した北の新天地

高さは20メートルを超え、幹の周囲は2メートル近い。真下に広がる林耕田を眺めるかのようなたたきまゝいは辺りの木々を圧倒する。

江別市東野幌の旧跡「千古園」にあるフナの大木。樹齢を推定するところ、いま正確には5本が、根を下ろす所が元は田圃だったためいつから5本のうちを本すつが寄り添いながら成長したらしい。千古園のすぐそばには古澤次吉郎さん(81)が教えてくれた。千古園は野幌地区の開拓団に

した開拓団左衛門(1844-1917年)の屋敷跡。老木はフナの子孫は1898年(明治31年)、孫左衛門が出身地の新潟県から持ち帰ったものだ。

「私にとってこのフナの大木は孫左衛門そのもの。常に佇み見る存在なんです。孫左衛門の日記を眺めれば、20年以上を費やして8000円超に及ぶ巨匠を著した北越道民司書の日記と共々(83)は感慨を込めていう。野幌開拓の移民団を率いたのは

旧長岡藩士宅に本社を構えた民間組織の「北越道民社」だ。創設者の一人だった孫左衛門が初めて野幌の地を踏んだのは1889年夏。翌年5月には新潟の農民200人以上を引き連れ、野幌への移住が本格化する。

北越道民社が誕生した1886年当時、西南戦争が招いたインフレを抑えるデフレ政策の影響で物価が下落。不況はとりわけ農民を直撃した。海を越える不安は拭いきれずとも、不逞転の覚悟で新天

地をめざしたにちがいない。

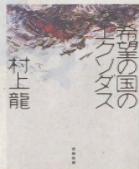
村上龍の小説「希望の国のエクソダス」で、集団不登校を起した中学生たちが将来を託した移住先が「野幌」だ。札幌と千歳の間にあるという架空の合併市で「フナ」と読む。時代設定は、1990年代から2000年代にかけて経済成長が滞った「失われた20年」にすっぽりとあまる。

希望の大地として小説の主舞台となった野幌「フナ」。

孫左衛門ら先人たちは古澤や別荘から眺めるにはよりふさわしい地だと誇らしげかもしれない。

文・松井 敏夫
写真・松井 徳直
112面に続く

今回の旅のおとも



希望の国のエクソダス

2001年6月、パキスタンとアフガニスタンの国境付近で地雷除去に携わる16歳の少年が日本を「もはや死んだ国」と米CNNテレビで発言。これに影響を受けた日本の中学生80万人が集団不登校を始め、パソコンで緩やかなネットワークを組織し、さまざまなネットビジネスを展開していく。閉塞感からの脱出先として北海道へ集団移住し、地域通貨を発行するなど実質的な独立国家を誕生させる。経済システムを含む日本社会の危機管理の純さをえぐる近未来小説だ。

1998年から雑誌「文芸春秋」に連載され、00年に文芸春秋から単行本、02年に文庫本が刊行されている。

村上龍は52年生まれ、長崎県佐世保市出身。大学在学中の76年に発表したデビュー作「限りなく透明に近いブルー」で芥川賞を受賞した。

「留魂」には関左衛門の自筆が刻まれている。93年(大正)4月の建(まなこ)式には祖父が参列して出席したと語る横沢吉郎さん



野幌神社例大祭で野幌太々神楽の舞を披露する伝承会員。演目は五穀豊穡(ほうじょう)を神々に感謝する「五穀神(ささげ)」



「江別の顔づくり事業」の一環で鉄道が高架化されたJR野幌駅と北口広場。周辺の整備事業も進んでいる



江別市元野幌にある米沢煉瓦の窯。長さは80m以上ある。1200度近い温度で焼いても形がほとんど変わらず、耐火性に優れた商品を生産できる野幌産煉瓦は「宝物です」と米沢昭二社長は言い切る

本と旅する

野幌



故郷の神楽 心の支えに

配りは見逃せない。

千古園から約1.5km南にある野幌神社で8月31日(9月1日)、新潟県長岡市から千古園地方に伝わる神楽を引き継いだ野幌太々神楽の舞が披露された。1898年(明治31年)に野幌神社例大祭で初めて神楽が奉納されてから続く伝統芸能である。

早々に見送っている。

「安住の地も、地位も何も放り投げ野幌開拓に懸ける志の高さ。豪放ですな」と。評伝を4年前に出版した石村義典さん(83)は断言する。

千古園内には毎早くとくし「横沢吉郎さん(81)の娘々、和吉さんは24歳、新潟県山形市(現・長岡市)から野幌へ移住した。孫左衛門に6年ほど奉公したという。祖父は「百那樣」と言いつく話をしてくれ

ました。名前を口にしたと一度もなかった。人柄は「とにかく優しい」と言っている。孫左衛門の労苦をしのぶ野幌開拓記念祭は毎年6月、千古園の留魂碑前で催される。碑の下に納められているのは孫左衛門の遺骨や爪、愛用品の櫛など。建立は孫左衛門晩年の1913年(大正2年)だが、重さ3トンの石を野幌からまきりで運搬し、村を

挙げての一大事業となったのは孫左衛門の人のゆえだった。新江別市史などによると、孫左衛門の場合は小作争議が起きたため、北海道への集団移住の中で成功例の1つとされている。

孫左衛門ら指導者の統率力に加え、渡航費や農具の貸与、自費で開墾した土地の9割を所有できる契約の工夫などが大きな要因なのだが、人心を束ねるうえでキチをすまやかに整えた目

最盛期には野幌15工場を数え、現在は3工場と減ったものの「市町村別の生産量は江別市が全国で最多です」。北翔大教授で「日本煉瓦史の研究」などの著書がある水野信太郎さん(61)は説明し、「れんがは野幌を支援した。今後のまちづくりに有効に生かしてほしい」と要請する。

江別市ではJR野幌駅を中心とする周辺地区の活性化をめざす「江別の顔づくり事業」が進む。完成予定は2019年度末。孫左衛門が野幌を初めて訪れてから100年目だ。

「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」。小説「希望の国のエクソダス」で学生が語った絶望の深さは、ノホロへの期待の大きさでもあった。孫左衛門が就書にのこした「前途安穏ナル土地第一故郷トナスヘキ野幌」の「開拓はこれからは彼」。

エブリ 地場産野菜コーナー人気

れんが造りの工場を用いた江別らしい商業施設が今年3月下旬に開業した。JR野幌駅南口から徒歩10分、JR野幌駅(2階)・JR野幌町3丁目(2階)のイシヤル、英語で「れんが」を表すブリックを組み合わせた名称だ。地元企業や農産物が、青や白の管などを製造していた工場だったが、1998年に廃業。市が歴史的建物として、その後土地を売却して取得、施設



の運営は民間から公募した。テナントは本格イタリアンレストランやコーヒー、洋菓子、雑貨、婦人服の店が入居する。新鮮な地場産野菜などを扱う「えぶり市場」も写真の1階にもあり、江別以外から来場者を呼び寄せる効果を上げている。観光客内所やイベントスペースも備え、地域の情報発信に努めながら江別の新しい観光拠点としての役割を担っている。

問い合わせは011-368-0670へ。